二次元ぷち文庫

未来くノ一スズラン

表紙イラスト：緋山狐

大熊狸喜

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『未来くノースズラン』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

未来くノ一

スズラン

大熊狸喜

表紙／緋山狐

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

スズラン

地球連邦所属の情報機関に所属する諜報員。黒いストレートのロングヘアに優しい目、魅惑的なプロポーションをしている。

メデュオス

敵対惑星の外交官を暗殺するため地球へ訪れた暗殺者。

西暦三四五六年、地球は一つの惑星国家として、宇宙惑星連合に所属していた。
様々な異星人と交流を持ち、別なる惑星に移住し、そして地球上にも多種多様な地球外の文明人が生活をしている、未来世紀――。

「はぁあぅ――ぁあんっ――ま、またっ…ィっちゃうぅ……っ！」
とあるホテルの一室で、男と女が裸の肉体を絡み合わせていた。
枕元のスタンド一つだけが灯る夜の部屋は、カーテンが大きく開けられていて、月光や都市の夜光が薄く差し込んでいる。
女は男の腰に跨がり白い尻を揺らし、男は女の豊かな乳房を荒々しく揉みしだいていた。
「ヘッヘヘ…清純そうな顔をして、ずっと尻を振りっぱなしだぜ」
女体を楽しむ男の肌は、地球人には決して有り得ない、濃い緑色をしている。頭髪はなく耳は尖り、眼球は水色一色で、イルグ星と呼ばれる星の人間だ。
乱れる女に気を良くしたのか、イルグ星人の男は更に強く腰を突き上げる。
そして異星の男に責められているのは、長い黒髪が魅惑的な、地球人の若い女だ。大きな瞳は性感に蕩け、細い脇腹が、広い女腰が、淫靡に汗濡れて肉体官能を伝えている。
「だっだってぇ、ぁなたの……が…す、すご――すぎるぅ……ぁふぅん…っ！」
逞しい勃起を奥深く咥える女の膣は、熱い蜜液を溢れさせながら、軟体生物のように絡

みついて締めつけて、男性だけがくれる熱と硬さを堪能していた。
濡れ壺の吸いつき感触を楽しむ男は、ルームサービスで呼んだ女が予想以上の上玉だった事に、充分な満足を得ているらしい。
「可愛い女だ、もっと悶えろ」
豊かな双乳を揉み上げられながら、長髪の女は密着させた腰を更に激しく前後させる。
責め上げられる肉体に合わせ、豊かな乳房がタププルと上下していた。
「だっだめぇ――イっイくぅっ…こんなのっ――んはんっあぁはあぁっ――こんなの、初めてえぇえぇぇっ……っ！」
背筋を目一杯に反らし、黒い艶髪を振り乱して、女は激しい絶頂に肢体を震わせる。
汗の艶めく白い喉や、上気して桜色に染まる肌が、異星の男を楽しませていた。
数瞬の痙攣を魅せた後、クッタリと脱力した肉体を男の胸に預けた女。
「はぁ、はぁ……イルグ星人の男性って、すごいのね。今汗を流してくるから、そしたら、また…ね…」
「あぁ…今度はもっと、地球人のお前に、天国を味わわせてやるぜ」
男の乳首を指で突っついてから、女はシャワー室へと向かう。シャワー室の壁は薄く透けていて、湯を浴びる女のラインがハッキリと見て取れる。
汗を流した黒髪の女は、露を拭き取った裸身にタオルを纏い、男の前に戻ってきた。

しかし――。

「うふふ……それじゃ、もう一度――え…!?」

ベッドに腰掛けたままニヤける男の掌には、ビームガンが握られていた。

「へへ…約束通り、天国へ招待してやるぜ」

鈍く光る銃口を向けられては、驚愕する若い女には、両手を上げる事しかできない。

上げた両腕で乳房が揺れて、裸体を隠していたタオルがハラリと床に落ちた。

「な、なに…それも、プレイ…？」

うろたえて後ずさりしながら、恐怖で視線を泳がせる黒髪の女。

「芝居も幕だ。お前はコールガールなんかじゃねぇ……地球の女エージェントだ！」

男が得意げに言いきった途端、女の雰囲気が一変した。うろたえていた瞳が冷たく引き締められて、口許には緊張と余裕の混ざったような笑みが浮かぶ。

「あら、とっくにご存じだったの……結構いい芝居してたと、思ったのだけれど」

「へっ、オレは安い女が好きなんだ。お前はいい匂いがしすぎらぁ」

予想外の言葉に、女は裸身を隠す事なく薄く笑み、敵の目を見据えた。

「うふふ…ひどい誉め言葉もあったものね」

長い黒髪はサラリと流れ、月の明かりで清潔に天使の輪を輝かせている。小さな顔には大きく凛々しい瞳が目立ち、芯の強さを窺わせていた。

細い鼻筋がスっと通り、小さな唇はキュっと引き締まっている。一見すると童顔にも見えるが、二十歳という年齢を考えると愛らしいという表現がぴったりだ。
細い首筋から続く、なだらかな肩のラインと、締まった身体。両腕を上げて晒される脇の下も毛穴一つないツルツル肌で、指は白魚のように繊細だ。
身長も百六十センチ余りと標準で、その為か九十六センチにも発達した大きな乳房が、より強調されている。全身の肌は白く魅惑的で、ツンと上を向いた乳房の先端で桃色に染まる媚突が、セクシーに異性の目を惹きつけていた。
お腹や脇腹は折れそうなほど細く、しかし女腰は緩やかなカーヴを描いて大きく広がっている。薄く皮下脂肪を乗せて引き締まった下腹部と、薄い恥毛を乗せている艶恥丘。
柔らかい女尻は、充分に発達しながらも重力に負けず、丸くつり上がって若い肉体をアピールしていた。
広い腰からニョッキリと伸びる腿は、ヒザを通って足首へと細く絞られていて、魅力的な脚線美を魅せている。
どこの銀河のスーパーモデルでも尻込みするような、最上媚の裸体を見せつけながら、女エージェントは正体を明かした。
「私は、地球連邦防衛諜報部所属、くノ一・スズラン。そしてあなたは、イルグ星人重犯罪者、狙撃のジギッド」

「お前がスズランか……凄腕だって聞いているぜ」
女諜報員の言葉に、犯罪者の男はニヤけたまま、銃口を外さない。
「あなたが今回地球にやってきた目的は、連邦政府の要人暗殺。依頼者は、地球と敵対しているジャンキュリアン星政府……」
「ほぅ、そこまで知ってやがるのなら話は早い。お前には死んでもらおう」
暗殺者の男は女の心臓に狙いを付ける。
三メートル以上離れた距離から銃を向けられているスズランは、一糸纏わぬ全裸だ。
緊張する女エージェントに向かって、余裕で笑っている、重犯罪者の男。
「くノ一スズラン……身体は天下一品だったが、諜報員としては…噂ほどではなかったなぁ……死ね！」
男が引き金を引くと、銃口からは赤い高熱のビームが発射された。
――ッバシューンッ！
瞬間、同時にスズランは素早く、身体を背後に撓らせる。
「忍法っ華秘蜂（はなひばち）！」
仰け反る胸の上では二つの乳房が天を向いて、深い谷間をビームがすり抜けた。
美しく弧を描き、弓なりに撓る女体。両掌をついた後転で、恥毛の透けた割れ目が、男に向けられる。

更に大きく素早く、右足を蹴り上げる全裸の女。両脚は直線にも見えるほどの、極限開脚。
「なっ――！」
男の視線が、晒された桃色の秘構へと、一瞬だけ本能的に惹きつけられてしまう。同時に更なる高速で、左足を蹴り上げるくノ一。
そして――。
――っっシュトっ！
「ぐっ――こ、こんな……」
刹那（せつな）、身体の動きが止まった男の額には、極細い鋼鉄の針が打ち込まれていた。そして異星の殺し屋は、数瞬で絶命する。
美しい後転を終えて、女は男を暗殺した。
「ふぅ……」
男と肌を合わせた事も、セックスに夢中になった事も、そして銃を向けられて緊張した表情も、全て芝居。
更に、男の本能を利用して一瞬の隙を作ると同時に、脚の爪に仕込んでいた毒針を高速の蹴りで打ち出して、目標を仕留める。
これらも全て、くノ一の床術。
「……さて、と」

全裸のくノ一は、やはり裸身を隠す事なく、男の首の右横、動脈に指を充てて死亡を確認する。
床に散らばる自身の衣服を拾い、ベッドに腰掛けながら、コートの襟に唇を近づける。
「スズランより報告。ターゲットの男、ジギッドの暗殺完了。以上、報告終わり」
隠しマイクを通じて、任務完了の報告を終えると、衣服とコートを肌に纏う。死体は、このホテルに潜入している別の諜報員が、本部からの通信を受けて片づける。
着衣を終えたくノ一は、床に倒れた異星の犯罪者を見下ろした。
「中々ステキな一時だったわ……それじゃあさようなら、狙撃のジギッドさん」
冷たい微笑みを死者に送ると、くノ一のエージェントは長い黒髪を風に靡かせ、ホテルを後にした――。

数日後の午後、一人ショッピングモールを歩くスズラン。ファッション中心のアーケードには様々な店が軒を連ねている。
ウィンドウには多くのロボットマネキンが他の星の衣服を纏って踊り、異星の立体映像モデルは美しい化粧で微笑み、最新の流行をアピールしていた。
そんな華やかなアーケード街を、女エージェントは特に目的もなく、ウィンドウショッピングに時を費やしていた。

サングラスにブーツにロングコートという、極めて平凡な格好。だがコートに包まれた肢体は、それでも恵まれた起伏を充分に感じさせるシルエットを造っている。
コートの下には、袖なしハイレグTバックという大胆な、黒皮のライダースーツを着込んでいた。この衣装は全て個人の趣味ではなく、形を変えた、くノ一装束だ。
スズランに名字はない。忍者の中でも名字を持てるのは、昔から里の頭目だけである。どれほど優秀な忍でも、与えられた名前以外は、たとえ肉体であっても個人の所有物ではない。
この魅惑的な女諜報員の、深層心理の奥の奥底には、里に対する絶対服従や、本人も知らない忍びの秘術などが施されている。
スズランにあるとすれば、太古から続く忍者の血を受け継いでいる、地球連邦政府防衛諜報部に所属する女エージェント、という事実だけである。
アーケードに隣接する広場で、忍の女はドリンクスタンドに立ち寄った。
「冷たいグリーンティーを、一つ」
並べられたテーブルの一角を借りて、見るともなく街を眺める。建物は有機的な曲線で構成された超高層ビルが多く、行き交う人々の半分は地球外の人種だ。
その光景は、千年以上も大昔に考えられていた、SF映画の景色にも似ている。昔の空想と唯一違う物といえば、道路を走る車は半重力などではなく、特殊な磁極同士の反発力

で浮いている簡単な技術、という程度だ。

「……」

何の変哲もない平和な街を遠い目で眺めながら、くノ一の脳裏にはふと、町中を全裸で歩く自分の姿が想像されていた。

歩きながらコートを脱いで、ライダースーツを脱いで、ブーツを脱いで、豊かな乳房も薄い恥毛も全てを晒している自分。

「……裸だわ、ふふ…」

何の意味もない、無駄な妄想。しかしこれでいい。

地球を護るエージェントの一人として、幾人もの敵対する命を奪ってきたスズラン。そんな女性忍者にとっての、たった一つの喜びは、ただ「生きている事」だった。

今日のこの時間のように、任務でも自己鍛錬でもなく、ただ無駄に流れる時間を感じる事。それこそが、名前以外で唯一持つ事が許された「自由」だった。

少し離れたテーブルで二人の若い男性が談話を楽しんでいる。妄想の自分が彼らの正面に立って、両手を拡げて裸を見せつける。

まるで自分が露出狂にでもなったかのような、イヤらしい光景。

「いいのよ、好きなように抱いて……」

そんな事を小声で囁く女の耳に、突然、聞き慣れた中年男性の声が聞こえてきた。

『エージェントスズラン、新たな任務だ』
「はいっ、直ちに詳細を確認いたします」
遠くを見ていた女の視線は、一瞬で鋭利な刃物の輝きを放つ。スズランにとっては当然の事だが、任務とはつまり暗殺だ。
通信機でもあるサングラスに映される情報を当たり前に覚え込みながら、コートを着た女は広場を後にする。
（ターゲットの名前はメデュオス。ドミドミオ星人の男……）
この異星人は、身長や肌の色など、地球人との外見的な差違は殆どない。敢えて挙げれば、眉毛がなくて、額から鼻に続くラインの窪みもない、というくらいのものである。
「暗殺者。またの名を…『死に神メデュオス』？」
これまで関わったエージェントは、男も女も全て返り討ち。一人として生きて帰った者はいないらしい。
「しかも、どの諜報員がどのように殺されたか、などの重要情報は、その殆どがお互いに、防衛上の機密事項……」
（…当然だわ……）
その為、得意な暗殺方法は不明、と書かれている。
「ただしこれまでの状況から、相手の銃器などを奪って暗殺に使用する、という可能性が

考えられる……」

だから今回の任務は、銃などを持たない自分に下されたのだと、くノ一は理解をする。

そして地球入国の目的は、敵対惑星の外交官を地球上で暗殺する事にあるようだ。

情報の中に、気になる一文もあった。

「一年前、某惑星にて右腕を喪失。しかし現在は両腕を保有。何らかの機械を仕込んだ義手の可能性が高い…」

宇宙医療も裏社会は技術が高く、骨組織に何らかの武器を仕込んでいるテロリストは多い。今回の相手に対し情報局は、どのような義手を使用しているのかまでは掴めていないようだった。

「会ってみるまで解らない……」

目的の男に近づく為、更に詳細なデータを確認する。

「ターゲットのお好みは、ボディラインが浮き出るスレンダーなドレス……地球で言えばチャイナ服ってトコかしら」

これまで犠牲になった女性諜報員たちがどのように近づいたのか、情報に記されていない以上、考えても仕方がない。

（……私は私の、一番得意な方法で近づいてみるわ）

暗殺者を暗殺する為に、女エージェントは宇宙港へと車を走らせた――。

地球で三番目に大きな宇宙港「ニホン・スペースポート」は、港とホテルと歓楽街が一つの大きな都市として設計された、宇宙でも珍しい場所だ。

宇宙船でやって来た人々は、入国審査を通過するとホテルの部屋に荷物を置いて、夜の歓楽街へと繰り出す。これもどこにでもある光景だろう。

そしてターゲットと接触をする為に、スズランは入国ゲートからも見えるバーでカウンターに腰掛けて、一人グラスを傾けていた。

長い黒髪を左右でアップに纏め、少し濃いめのピンク色をした、袖なしチャイナドレスを纏っている。

足下は赤いハイヒールで飾られて、隣のシートにはロングコートを引っかけていた。

今着けているのは極普通の眼鏡だが、チャイナと眼鏡という少しアンバランスな格好の方が目立つ、という計算で着けている。

(午後十時二十七分着、惑星リシアからの直行便……今の便で、入国したはずだわ)

カウンターに向きながら、背中で入口の気配を探る。数人の客が店にやってきた。

(……男性が三人…女性が二人……ただの観光客…)

窓ガラスの反射を利用して、目だけで数組の客を確認していると、女忍者は突然ナイフのような、鋭く突き刺さる雰囲気を感じた。

（――っ！　来た、ターゲット！）
社会の裏側で生きる男の持つ、独得の雰囲気。それはまるで、カミソリの爪を持った理性ある猛獣、とでも言おうか。
目的の相手がこちらを見つけた事も、背中で感じ取る。
（……ん…こちらを見つけたみたいね）
命を掛けた仕事の前に女を抱くという行動は、昔から変わらない牡の本能の一種だ。女に目を付け、少しだけ緩んだ暗殺者の空気。
そして女エージェントは、罠を仕掛ける。
「うぅん……はぁ…」
項も露わにカウンターへと上体を崩し、酔った女を演出する。そして眼鏡を掛けたチャイナドレスの女に近づく、大柄な男。
「失礼、お隣は空席かな？」
「んん……あら、どぅぞお好きな席に……」
酔った視線をチラと向けて、コートを自分のヒザに乗せながら、女エージェントは悟られぬように相手を確認した。
（ターゲット、メデュオスと確認）
男は全身タイツにも見える標準的な黒いツーピースの上に、青い上着を着ている。

細かい上下動で肢体を揺すられ、発する言葉が細切れにされる。
（こんな、テクニック…まで…っ！）
何人もの男性犯罪者と肌を重ねてきたくノ一でも、呂律を回らなくさせられるほどの、強くて甘い性快感。
「呂律が回らないほどいいのか？　クックク」
勃起の起伏を使って膣孔を集中的に責められると、満たされない子宮で余計に飢餓感が膨張させられる。更に達したばかりで性神経も敏感なままでは、簡単に新たな絶頂へと押し上げられてしまう。
「ひゃめっラメえぇんっ――おかっ、ぉかひくなっひゃっ……いっいいいいっ…！」
（ま、また……イっちゃう……っ！）
振動させられる女体に合わせ、剥き出しの双乳がタプダプと上下に揺れる。上半身からは力が抜けて、縋（すが）るように男の頭へと抱きつく、女エージェント。
「つくづく可愛い女だ、このままイかせてやるぜ」
――カプチュっ！
「ひぅっ――!!」
先端で振られる媚突を男の口に含まれた瞬間、膣孔と乳首の両方から鋭い性感が送られて、心臓がドキンっと跳ねさせられた。

えっちシーン試し読み ここからスタート！

「まっまたイっ――イっちゃっ……ラメえっえふっ――んぐんんっ――っ!!」
目の前が白光に包まれて、スズランは再び絶頂へと導かれた。
敏感な入口を責められ続けた膣壁が、太い肉角を物足りなげに締めつける。抱きついた肢体が硬直して小さく震え、巨乳で男の顔を挟んでしまう。
そして再度の、敵の膣内射精。
――っびゅクどブゅぐッっぶビゅぶルっビュううウウうぅぅっ！
「ま、また…なかに……れも、いいぃ……」
快感に蕩けた瞳を異星の男と交わらせる、黒髪の女諜報員。二度目の絶頂は一度目よりも更に深く、肢体が溶けてしまったような気怠さを感じる。
そして一方で、浅い挿入で責められた姫孔と聖宮は、女の脳にどこか満たされない飢餓感も残していた。
「はぁ、はぁ……なんだか…ヘンな、感じ」
（身体の奥に…まだ、欲しい……）
意識を溶かしながら、冷静に自己分析をする。そんな女体の性欲求を、慣れた男は当然見抜いている。
「今のじゃ、不完全燃焼だろう？」
「…そうね……ひどい男だわ」

恨めしそうに、しかし次を期待するように、拗ねてみせる女。
「まぁな、なんたってオレはまだまだ、お前を楽しみたいからな」
言う通り、犯罪者の肉塊は未だ挿入されたままだ。しかも二度の射精を終えたにもかかわらず、熱と硬さを保っていた。
「さぁて、今度はオレが、突きまくってやろうかな？」
イヤらしく笑う男の掌で、そのままベッドに押し倒される。自身の汗と男の唾液を纏った白い乳房は、天井を向いて、でき立てのプリンのように柔らかく揺れた。
そのまま身体を回されると、左側が下になるような、横寝の姿勢にされる。
回転の動きに、膣内が男性器の硬さで、グリュッと大きくかき回された。
「んあぁっ――中で、暴れる…っ！」
「暴れるのはこれからさ、脚を上げるぜ」
「え――ひぁん…っ！」
右腿を捕まれて大きく開脚させられると、チャイナのスリットが捲れ落ちる。艶々に張りを見せる白い腿が露わにされて、男は女の腿を抱きしめた。
「今度は深いぜ、ほぅら」
言うやいなや、女諜報員の秘処に向かって自身の体重を掛けてくる、ターゲットの男。
「んん――ぁは、はあぁあ…っ！」

強い圧力で太いペニスを押し込められて、息が抜かれる。更に筋肉質な男性の下腹部が熱い秘唇に押しつけられて、濡れ粘膜が圧迫された。

男の体重が掛かった側位での挿入は、予想以上に奥深くまで肉詰めにされてしまうようだ。狭い膣筒は隙間なく肉密着をさせられ、勃起先端の一際熱い亀頭部分で子宮の入口を突っつかれた。

「お、奥まで……こんなの、初め、てぇ……っ！」

（ホントに……深い…！）

勃起詰めにされただけで、三度目の絶頂へと導かれてしまいそうだ。

それなのに、熱い肉弾力で子宮口を突かれていると、更なる欲求が湧き上がってくる。

「ココがいいだろう、ええ…？　クククク」

男は更に女の腿を抱き寄せながら、器用な腰の動きだけで、過敏な入口をこね回した。

（ひぅっ――ま、また……イきそぅ…っ！）

ターゲットを油断させる為のセックスとはいえ、これほどの快感を感じさせられるのは初めてだ。床術に秀でた忍びの女は、敢えて淫らな女になりきり、自らの肉体欲求に従う事にする。

「いいっ――いいわぁっ……そのままぁっ、突いっ――んぁんんっ…突いてぇっ…！」

女の欲求を自白させた男は、勝ち誇ったように腰打ちを始めた。

「コイツはこれから、お前の主人となるモノだ。身体で挨拶をしろ」
「ぁぅ……はぃ…」
スズランは返答をすると、後頭部で組まれていた両掌を解いて、タップリと実った自らの巨乳を左右から持ち上げる。
そのまま更に前進すると、天に向く赤黒い角肉を、白い乳房で挟んだ。
――むちゅり……。
(あっ、熱い……)
はだけた谷間の底まで熱ペニスに触れると、皮膚の薄い胸が火傷(やけど)するように感じる。
同じ男性器なのに、心臓の近くで触れさせられると、膣内で感じさせられていた性熱とは、違う熱だとさえ思えてきた。
逞しく勃起した勃起の熱で、心臓の鼓動がトクトクと速められてゆく。
目の前の黒牡肉からは、男と女の混ざりあったイヤらしい匂いまでもが漂ってきて、その匂いで女の官能が一方的に擽られた。
「お前のその巨乳なら、オレのモノを包めるだろう?」
「は……はぃ…」
自身の乳房を左右から、更に両掌で寄せると、ビール瓶ほどの太さを持った男のペニスが、乳脂肪で完全に包まれる。

えっちシーン試読み ここからスタート!

黒い肉角を巨乳に包まされると、主への挨拶をさせられ始めた。柔らかい乳房で挟んだ硬肉を、上下に摩擦して愛撫する。

……すリぬるりュ、つるチゅ…ヌるつルゅり、ルぬたぷりちゅ……。

勃起の反り返りに合わせて器用に上体をくねらせながら、決して谷間から放さないように乳房を押さえ、締めつけるようにペニスへの肉体奉仕をさせられる。

淫交液を纏った硬肉はヌメり滑り、女体の汗と合わせて、キツく挟まれた滑らかな愛撫を受けていた。

「流石はくノ一…パイズリのテクも、並の情婦なんかメじゃないなぁ」

（くぅ……っ！）

柔らかく挟む巨乳の感触を楽しみながら、暗殺の男がエージェントの髪を撫でる、と同時に目の輝きが、礼を言え、と命令を下す。

「あ、ぁりがとぅ……ございぃ、ます……」

「それでいい……クックク」

正体が知られた以上、もう肉体関係を結ぶ必要はない。今こうして乳愛撫をさせられている事は、ただの陵辱。

（メ、メデュオス…め……っ！）

屈辱的な性奉仕をさせられながら、肉体は確実に敵の所有物にされてゆく危機。

(何か……催眠から逃れる、手は…)
隠し針の一本でもあれば、自分の身体に刺して抉って、痛みで催眠から逃れられるチャンスもある。
しかし今夜は、武器を奪われる事を警戒して、身体一つで来たのだ。まさに丸腰。
部屋の中にもガラスなどの、武器になるような物は何もない。
(ど、どうすれば……)
暗殺ターゲットに乳奉仕をさせられながら、くノ一の脳裏には焦りと絶望感が、暗雲のように広がってゆく。
女の焦燥を読み取った男は、更に絶望的な言葉を投げかけてきた。
「射精を受けながらお前がイけば、抵抗している心も完全に封じ込められる。そうすればお前はもう、身体も心も…オレのモノだ」
(犯されて、イったら……!)
そう思った途端、操られるスズランの胎内が、残された精液を強く意識させられた。
(な、なに……っ⁉)
「お前の子宮も、オレのイチモツを忘れられないでいるだろう?」
ニヤける男。幾度もの肉交で牡液を放たれた膣内が、男性器の持つ存在感を、どうしようもなく再び、求めさせられる。

（い、いけない……）

さっきまで熱肉で満たされていた膣壁が、埋められていない空疎感を訴え始めた。

子宮の中では強い飢餓感が風船のように膨らまされて、理性と肉体を性欲求で圧迫してくる。

秘唇が蕩けるような切なさで濡れて、下半身がモジつく。勃起を挟む上半身も、男性の存在感が欲しくて身をくねらせていた。

（身体が、勝手に……）

男性器の圧倒感を感じたくて、二つの巨乳は更にキツくペニスを挟む。牡角を愛撫しながら、女体は柔らかく淫らに波うちクネリ、視覚的にも男性を誘う。

――たぷリぬュルむり、るっちゅぷルっチゅる、たぷタぷるムぬゅる。

（胸が、熱い……っ！）

胸の谷間で反り返る勃起が、愛おしくて堪らない。この逞しい男性器をさっきまで埋められていたのかと思うと、もう一度熱く満たされたい、とまで思ってしまう。

男性器独得の熱と重たさに、思わずコクリと喉が鳴る。

「はぁ……コクリ――ぁんん…」

（このまま、では……っ！）

奉仕する女体が目の前の男性を求めさせられると、脳裏までもが性の飢餓感に圧迫され

始めた。
（の…呑まれ、そぅ……っ！）
女諜報員の喉を聞いて、男は新たな命令を下す。
「オレのモノが欲しいなら、咥えてもいいんだぜ。スズランよ」
（だ、誰が…咥えっ――く…っ！）
屈辱的な言葉に、心は怒りを感じるが、肉体は性欲求に従順だった。口に含むという行為に、肉体は性興奮で期待をし、項まで上気して桜に染まる。
淫液ヌメ光る黒いペニスを、スズランは自ら口に含んだ。
「ぁぁぁ……ぅれしぃ、です……ぁぷ」
赤い唇が肉黒い勃起の先端を含み、大きく開いた傘を呑み込んでゆく。
――つぷチゅぷ…くぷチゅむつぷ……。
破裂しそうなほどの張りと艶を見せる亀頭部は、プニプニとした薄い皮膚の下に芯がある、独得な硬さを感じさせる。
赤ちゃんの皮膚と同じくらいツルツルの表面は、くノ一の唇に弾力と熱い性熱を押しつけてきた。
「んん……ほっきひ…んぷちゅ……」
硬い男性器を含まされるという行為に、肉体は勝手に歓喜をする。更に熱勃起を奥へと

呑み込んでゆくと、唇は皮膚のザラつく本体を咥えていた。
（口の、中が……敵の…で…っ！）
咽頭部に届くほどペニスを含むと、舌が勝手に口内勃起を舐め始めてしまう。
――ペロり、レロちゅ、るちゅペロル……。
和合液に濡れたペニスを口内いっぱいに含まされると、鼻腔の奥までもが淫性臭に侵されてゆく。精液と愛液の混ざった淫液はしかし、精液の苦さだけが強められていた。
（うぅ……くさい、のに……）
相手を陥れる為の性行為ならともかく、正体を知られている今は、嫌悪感しかない。イカと濁り塩と卵白が混ざったような、有機的な精液臭に、嘔吐感（おうと）さえ起こってくる。
それなのに、白濁液で熱せられる胎内に焦らされる女体には、勃起を呑み込む唇が、ペニスを舐める舌が、硬さも匂いも美味しいとさえ感じさせられてしまう。
熱い牡肉で口内を占拠されてしまうと、女の身体は唇の抽送愛撫を捧げ始めた。
――ぷチュぬるうぅ…チゅプぷプぷ……つゅプぢゅちゅ～ぅ…ヌルぷつプぷ……。
自ら唇を締めてペニスの硬さを感じ、本体の全面に濡れた舌を這わせて勃起を舐め上げ、熱を味わう。
「自分で愛撫を始めたか……どうだ、美味いか？」
「んくんん……ぁい…ぉいひぃ、れふ……ちゅうぷ…んぐ、んく…」

（おい、しぃ……）

喉の更に奥までをペニス詰めにされると、勃起の熱が脳にまで伝搬してくる。口内で感じる男性器の重さと硬さと熱さで、子宮の飢餓感が更に膨張させられてしまう。

愛液溢れる秘唇の切なさで理性を圧迫される女の脳は、瞳から浴びせられる強烈（きょうれつ）な催眠光線と相まって、容赦なく服従へと躾（しつ）けられ始めていた。

（や、やめなきゃ――でも、唇が…舌が…）

封じられゆく意識が必死に抵抗するものの、操られる肉体は更に性感を求めて、男に奉仕を捧げてしまう。

（……こうすると、だんせいは…もっと……）

カリの裏側をペロリと一周して、先端の鈴口に舌を差し込む。本体を挟む巨乳を上下させながら頭を前後させて、唇で亀頭部を愛撫しながら、裏側の弱点を細かく舐め責める。

豊かな乳房や挟まれるペニスが、蜜と唾液にまみれて濡れて、イヤらしい柔艶を浮かせていた。その姿は男に対し、女の淫らさを十二分に魅せつける。

床術の優秀なくノ一とはつまり、優れた娼婦でもあるのだ。

「やはり地球人はいいな。服従の姿がこれほどそそるのは、地球の女だけだ…クックク」

（お…おのれっ……）

ターゲットに罵られ、理性は恥辱に震えるのに、肉体は濃密な舌奉仕をやめない。

「んっんっ……はふ――ぺろり、ちゅぷくぷプチュん…コクり……」
勃起に纏っていた唾液は先走り液と混ざり、薄い苦味のゆるい粘液となる。そしてスズランは淫らな汚粘液を吸い、舐め、喉を鳴らして嚥下する。
「先走りの液体にも、薬品は混入されているんだぜ。さぁ、もっと呑むんだ」
「んく――は…ぃ……かぷ」
(こ、こんな事を…して、いては……)
鈴口と裏筋を交互に責めると、その度に少量の苦い汁が溢れてきて、奉仕のくノ一は新たな肉体変化を教えられた。
「どうだスズラン、オレの精液が、美味しくて堪らないだろう?」
(な、なにを――えぇっ!?)
驚愕するスズラン。心の中で抵抗しようとした時、口内での味覚が急速に変化させられたのだ。
嘔吐しそうなほど苦い男汁なのに、女の舌は一瞬で嫌悪感を失い、抵抗感どころか自ら欲するほどの、極上な媚味と感じている。
(味覚が、変えられた……!)
体験した事がないほどの、強力な催眠力に動揺し、瞳が揺れた。
「クックク…いいぞ、もっと飲み込め」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/